ハハな人たち

原田宗典

著者略歴

原田宗典(はらだむねのり)
1959年東京生まれ。早稲田大学文学部演劇科卒業。
1984年『おまえと暮らせない』で第8回すばる文学賞入選。
劇団「東京壱組」の座付き作家として戯曲も執筆。
7歳の佳苗ちゃんと4歳の直弥くんの父。

ハハな人(ひと)たち

著　者　原田宗典(はらだむねのり)©

発行者　原田邦穂

発行所　株式会社　婦人生活社
〒113 東京都文京区湯島2-19-5
電話　編集部03・3815・7386　販売部03・3815・7332
振替／東京0-37892

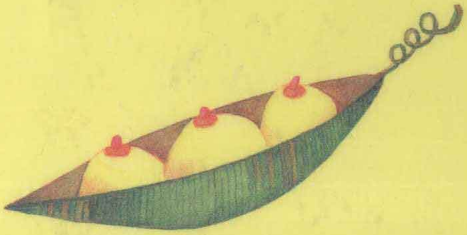
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　共同製本株式会社

©1995 Munenori Harada　Printed in Japan
ISNB4-574-70097-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
本書を無断で複写(コピー)することは
著作権法上認められている場合を除き、
禁じられています。

ハハな人たち

原田宗典



定価……1300円(本体1262円)
ISBN4-574-70097-1 C0095 P1300E

処理済

人間を見る目に長けた人。ゆえに主婦兼塾の講師兼作家――花形みつる 133
思いっきり華のある人。こんな人の息子もいいな――佐藤しのぶ 145
落ち着いた大人の女性。不思議な魅力に陶酔――真行寺君枝 161
真摯で勇気ある人。異国でもその強さ変わらず――コリーヌ・ブレ 173
気配りあふれる人。この得難い天性の敏感さ――安藤和津 189
あとがき――204

初出誌「セサミ」（婦人生活社）91号（'93年1月）より102号（'94年11月）まで掲載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

イラスト　長岡　毅
装丁　小阪千津子
写真　本社写真部

ハハな人たち

はじめに

「男は黙ってサッポロビール」

という広告のコピーをご存じだろうか。もうずいぶん昔のことになるけど、キャラクターに三船敏郎を起用したこの宣伝が、一世を風靡したことがあった。ぼくはまだ小学生だったが、なるほどそういうものなのかと感心し、やっぱり男である以上は黙ってなきゃいかんのだな、そのほうがカッチョいいのだなと学習した。不言実行、なんていう四字熟語を習ったのも、この時期だったように思う。サッポロビールをうぐうぐ飲むときだけでなく、武田のプラッシーを飲むときもヤクルトを飲むときもワタナベのジュースの素で、もう一杯を飲むときも、男は黙っていたほうがいいに決まっている。

「第一、黙らないで喋りながら飲むことのほうが難しいしな」

なあんてことを考えて、なにかを飲むときはもちろんのこと、なんにも飲んでいないときもできるだけ黙っていて、男としてのカッチョよさを身につけようとしていたわけである。

黙っているほうがカッチョいいのに、と分かっていながら、口のほうが勝手に動いてしまうの

である。相手が寡黙な人の場合は、自ら場を盛り上げようとしてせっせと喋り、相手がお喋りな人の場合は、対抗意識を刺激されてそれを上回るほど喋る。ようするに相手が喋ろうが喋るまいが、とりあえず喋ってしまうわけであるが、なかでも特に相手が女性となると、ぼくの口の回転数は著しく上昇する。男が相手だと一分間に二千回転くらいしかしないところが四千回転くらいまでハネ上がったりする。しかもその女性が、ぼくの知らない世界に生きていて、こちらの好奇心を刺激するような話題をいくつも持っていたりすると、ターボが働いてお喋りの回転数はレッドゾーンに突入し、オーバーヒートで口がひん曲がっちゃったりする。

「やだなあ。おれってまた調子に乗って喋ってる……」

と喋っている最中に自分を客観視してイヤになることも多々あるのだが、だからといってお喋りの勢いが止まることはない。これはもう性格の一部というか人格の一部をなしているようである。

人格なんだからカッチョ悪くてもしようがねえや、と最近では開き直るようになり、開き直りついでに連続対談のホストを引き受けたのが、今回このような形で実を結んだ。もともとの掲載誌が「セサミ」というお母さん雑誌で、対談のお相手は各界で活躍する女性ばかり、という条件も、ぼくの重い腰を上げさせる大きな理由だった。

作家というのは因果な商売で、一生懸命に取り組めば取り組むほど本人は孤独になっていく。ようするに一人にならなければ成果があがらない仕事なのである。だから何年か作家活動を続け

て、周囲の人間関係が定着してしまうと、新しい出会いというものが極端に少なくなってくる。特に妙齢の女性と出会って、二時間なり三時間なり差し向かいで話すなんて機会には、滅多に恵まれない。これはやはり悲しむべきことではないか。

そんな僕にとって、こういう対談のホスト役を与えられたことは、願ってもないナーイスな機会であった。しかも相手は、望んでもなかなか会えないような女性ばかり。マスコミを通じ喧伝される彼女たちの華やかな一面ではなく、子どもの母親として生きる側面を取り上げていこうという対談の主旨も、新米の父親であるぼくの好奇心をいたく刺激した。毎回、対談の前には、遠足を控えた小学生のようにわくわくし、

「今日はどんな話が聞けるだろう」

と期待に胸を膨らませながら家を出たものである。この他人まかせの態度は、ホストとしてあまり褒められたものではないが、まあ勘弁してもらいたい。結果として、彼女たちは誰一人としてぼくの期待を裏切らなかったし、その話を僕だけでなく、こうして多くの人たちも隣で耳を傾けていたように読めるわけなんだから、よしとしてほしい。

見ているだけで楽しい人。
こんな母親、ほしかった。

小西聖子（こにしたかこ）

精神科医、医学博士。1954年東京生まれ。東京大学教育心理学科、筑波大学医学専門学群卒業。専門は精神保健、犯罪精神医学、被害者学。著書に『おしゃべり心理学』。12歳と9歳（対談収録時は10歳と7歳）の男の子の母。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

原田　男親って、いい加減なものですよ(笑)。ぼくはそんな男を父親として持ったんだけど、ちゃんとそれなりに育ってるから、だから、まあ父親はいい加減でも大丈夫か、と思ってるんです。きっとよくないんだろうけど(笑)。

小西　でも、家って一軒一軒すごく違いますよ。お父さんとお母さんという人がいるってぐらいしか共通点がなくて、よくよく聞いてみると、ここのうちで常識のことがこっちのうちではとんでもない非常識だとか、そういうのがいっぱいあるので、あまり他人のことにこだわってもしようがないというのはありますね。

原田　うちの息子は、ぼくがちっちゃいときにそっくり(笑)。まったく同じことしてる。だから、ちょっといやなの。異性である娘はかわいがりたいんだけど、息子はあんまり(笑)。

小西　身勝手な(笑)。確かに同性の子どもと異性の子どもは違うのかもしれないですね。うちはあいにく娘がいないのでよくわからないんですけれど、男の子は観察していておもしろい、私と違うから。遊びも友達関係も違ってる。女の子だときっと関係ないと思うか、いろんな思い入れをするか、どちらかになっちゃいそうな気もするんです。持ってみないとわからないけど。

原田　ぼくは今、小西さんがおっしゃった男の子に対して思うような思いを娘に対して持ってるわけです。自分が小さいときと違うところを見て、おもしろがってるというか、それで娘をかわいがってるんです。

小西　いずれにしても自分とよく似た子どもがいてうれしいっていう親の心境はわからない。

原田　ちょっとやだよね、あのダダのこね方とかさ。何を考えてるか何となくわかるんだ。
小西　そうそう。裏が見えちゃうっていうのはありますよね。だから、私のようになってほしくないみたいな気持ちと、まあまあこの程度にはなるんじゃないかという気持ちと、両方重なって。
原田　たぶん、ぼくの父親もぼくを見てそういう感覚を抱いてたような気がするんだ。そのせいか、ときどきすごくいいことを言ったんですよ。ぼくが思春期で高校生ぐらいのときに、自分が付き合ってたガールフレンドが別の男の子と歩いてるところへ、オヤジと一緒に車に乗ってちょうど出くわしちゃったことがあったんですよ。だれなんだろうと思って「オーイ」って声を掛けたら、彼女が「中学のときの友達の何とか君」と紹介してくれて、「あっ、そう、どうも」「じゃあね」と言って行っちゃったんです。ぼくはオヤジとまた車に乗って、シーンとして、もう頭のなかはグチャグチャになってるんです(笑)。だれなんだ、何をしようとしてるんだ。そういうことを考えてた。

　オヤジはそういうこともちゃんと一目見てすぐわかってるんですよ。だから、そのときに言ったのが「つまらない焼き餅は男を落とすぞ」。今でも覚えてるけど、もうグサッ(笑)。そうだなと思ったけど、そういうふうに息子が考えてることってわりとよくわかる。だから、ぼくも今から息子向けにいろいろセリフを用意してるんだけど(笑)。
小西　お父さんのことがすごくいやになる時期って、ありましたか。
原田　ありましたね。うちは家がめちゃくちゃになった時期があって、大学に入って二年目のこ

ろかな、一家離散をしたんですよ。父親が博打打ちで、博打打って借金を抱えて、それをサラ金で埋めようとしたんです。十何年前にサラ金地獄とかいうのがあったでしょう。ちょうどあのときでね、もう大変な借金を作って、夜逃げしなきゃならないということになっちゃったんです。そのとき父親とは決定的に対立してしまって、いまだに完全には仲直りしてませんね。とにかくすごく嫌いになりましたよね。小学生のころとかは父親のことがすごく好きで、夜、帰ってこないと布団のなかでオヤジが死んだらどうしようと思って泣いたことがあった。それぐらい、すごく好きだった、ぼくにはわりと尊敬の的である父親だったんです。それがある日突然、手のひらを返したようにダメな男になっちゃったんだよね。だって、借金をこさえて、三週間失踪。もうこれで帰ってこないんじゃないかってみんな言ってたら、のんびりした顔で帰ってきたんだけど、借金取りがうちにいっぱい来てどうするんだって言ったら、「うん、オレにももうわからない」。もう働くのもやめちゃって、お金をどこかから借りてくると、それを持って雀荘へ行っちゃう。そういう日が毎日続いて、今までのオヤジはいったいどこへ行ってしまったんだというくらいに、ある日突然違う人になっちゃったんです。

小西　すごくドラスティックな変化ですね。

原田　うん。だから、ぼくの乳離れというか、自立というのは無理やり。そういう状態だったから、もう自立せざるを得なかったというような感じがありましてね。そんなことがあって小説家になったわけですけどね(笑)。

小西　外から一気に変わられたら、やっぱり厳しいですよね。
原田　小西さんも転校が多かったそうですが、ぼくも小さいころすごく転校が多くて、状況が変わってそこに馴染む力みたいなものは、ちっちゃいときから培われていたような気がするんです。だから、父親がこんなになって、ぼくも働かなきゃならない、家も離散したっていうときも、めげませんでしたね。あまり悲しむとか、そういう暇がなかった。翌日から適応してた(笑)。
小西　先に外だけ適応しちゃうんですよ。それがトラウマじゃないってことは絶対にあり得ないと思います。私なんかもウワッとストレスがかかってきたときに、ほんとは怒ればいいのにそれが怒りになって出なかったり、ほんとは泣けばいいのに、すぐ泣けなかったり、今でもけっこうそういうところがあるんですよ。だから、外から見ると、どんなことにもくじけなくて、すごく安定した人っていう形になるんだけど、適応しなくちゃっていうほうが先で、まず適応を図っておくから、後でどうしてもとがめが来ますよね。それをグチグチグチグチこぼして。そのはけ口として原田さんは小説を書いて、私は精神医学にはしって、発散しているのかもしれません(笑)。
原田　そうですね。
小西　お父さんのイメージがちゃんとないと子どもがうまく育たないって言われるけれど、今のお父さんは権威がない。わりと年配の男の人なんかが、父親はもっと雷おやじであれとか言ったりするんですけど、たぶん雷おやじになれって今のお父さんが言われたって、せいぜい頑張って、感情的に怒るぐらいのことしかできない。それよりは、やっぱり自分の自然体のところで新しい

関係というものを持っていくしかないと思うんです。だから、こういうふうにやればよくなるという発想の元が全然違ってるんじゃないかなと思います。私のうちなんかは、私が仕事をしてるし、性格的にどちらかというと男性的なところもたくさん持っていて、逆に父親のほうは父親のほうで、買い物がすごく好きで、家の仕事が好きなんですよ。

原田　ジョン・レノンみたいな人だね。

小西　だから専業主夫になりたいってずっと言ってたんです、私が今の三倍稼げば(笑)。今も、私はわりと夜遅いことが多いから、朝ご飯を作って子どもに食べさせてくれる。だから、ほんとに家事も半々で分担しようと思えば半々でできるんです。でも、どうしても子どもがお母さんのほうが好きだから、子どものことはわりと私のほうにまわってきちゃうんです。いずれにしても、子どもは基本的には情緒の安定があって、人に対する同情というか共感性というのがあれば、まあいいんじゃないかなっていう気もすごくするんですよ。

原田　それぐらい気楽に構えてるといいんだよね。子どもにどうなってほしいとかいうのは、すごくシンプルに考えたほうがきっとうまくいくんだろうな。

小西　わりと本人の持って生まれたものも大きいし、ちっちゃいときにある程度安定した家庭があれば何か大丈夫な気もするんですよね。もちろん母親とは限らず、愛情を持って安定したケアをしてくれる人がいるというのはもう絶対の条件ですが、あとは持ったものを本人がどういうふうに生かすかということで、親は責任を負いたくない(笑)。本人次第という部分が大きい。

原田　安心しちゃった(笑)。

管理職になりたかった少女時代

原田　そもそもこういう道を選ばれたのは。

小西　うちは父親が自分ではエリートサラリーマンだと思ってるような感じの人で、私の弟である息子にすごく期待をかけたんですね。娘のほうはそれほどでもなかったんだけど、私は要領がいいからホイホイと何とかやってきたんです。だから、お嫁さんになりたいとか思った記憶がないんですよ。小学校の卒業文集に会社の管理職になりたいって書いている(笑)。それは父親になりたいってことなんですよね。でも、中学ぐらいになると、私は女だってやっぱり気がつきまして(笑)、これはいかんと思うわけで、そうすると父親のいやなところとかがいっぱい見えてきて、もう父親は目標にならない。で、やっぱりいいお母さんになりたいっていう気持ちも出てくる。だから、母親と父親と両方追いかけるみたいなところがあって、そんなの破綻するのは目に見えてますよね。高校のころって、成績が一番だったりすると、女なのに、とグチャグチャ悩んで、アンビバレンス(矛盾する感情)。それでご多分に漏れず、心理学へ行くといいかな。よくあるパターンなんです。大学に行ってふっきれましたけど。

原田　心理学は学問としておもしろいでしょう。

小西　大学を出て、障害児の施設に勤めたんです、心理の仕事で。実際の仕事は保母さんみたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c